

令和5年度茶臼山動物園での個体管理と次年度の飼育方法（案）

1. 野生復帰後の個体管理

(1) 飼育羽数

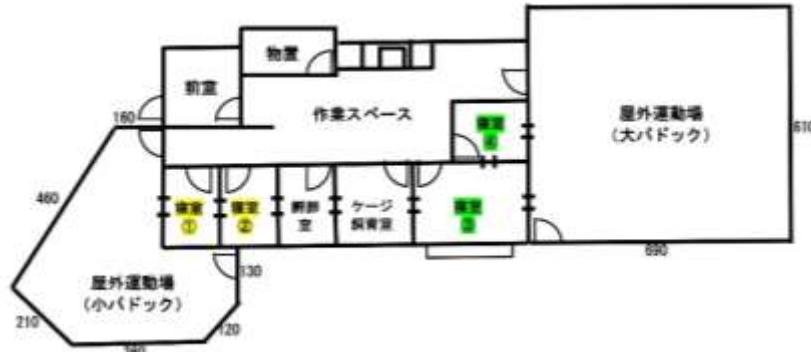
8月 10 日に中央アルプスへ成鳥 3 羽（♂空、♀親、♀赤）を移送後、繁殖羽への換羽にうまく切り替わらず産卵しなかつた雌 1 羽（♀黒）とそのペアであった雄 1 羽（♂青）の計 2 羽を飼育。

(2) 飼育室の変更

小パドックが高温になるため、8月 20 日に雌雄ともに大パドック側の寝室に移動させた。日中は寝室④（雄の部屋）と大パドック（屋外運動場）をフリーにして同居させ、夜間は雌雄それぞれの寝室に収容している。お互いの姿が視認できないと落ち着きがなくなるため、1月現在も日中の同居は継続している。

♀黒…寝室②→寝室③

♂青…寝室①→寝室④



(3) 換羽

雄（♂青）は、繁殖羽、秋羽と切り替わり、10月上旬から顔のあたりから冬羽に換羽が始まり、12月下旬に換羽が終了した。1月現在、茶色の羽根が 2 点ほど残った状態である。

雌（♀黒）は、6月中旬から下旬に繁殖羽が全体の 3 分の 2 程度で停止していたが、飼育室の変更後、9月中旬から繁殖羽への換羽が再開し 10 月上旬まで続いた。その後、秋羽にはならず、10 月下旬から顔のあたりから冬羽に換羽が始まり、12 月中旬には換羽が終了した。9月中旬から再開した分の繁殖羽だけ抜けずに残ったのか、茶色の羽根が体全体にまばらに点

在した状態になっている。

雄（♂青）



雌（♀黒）



9月10日

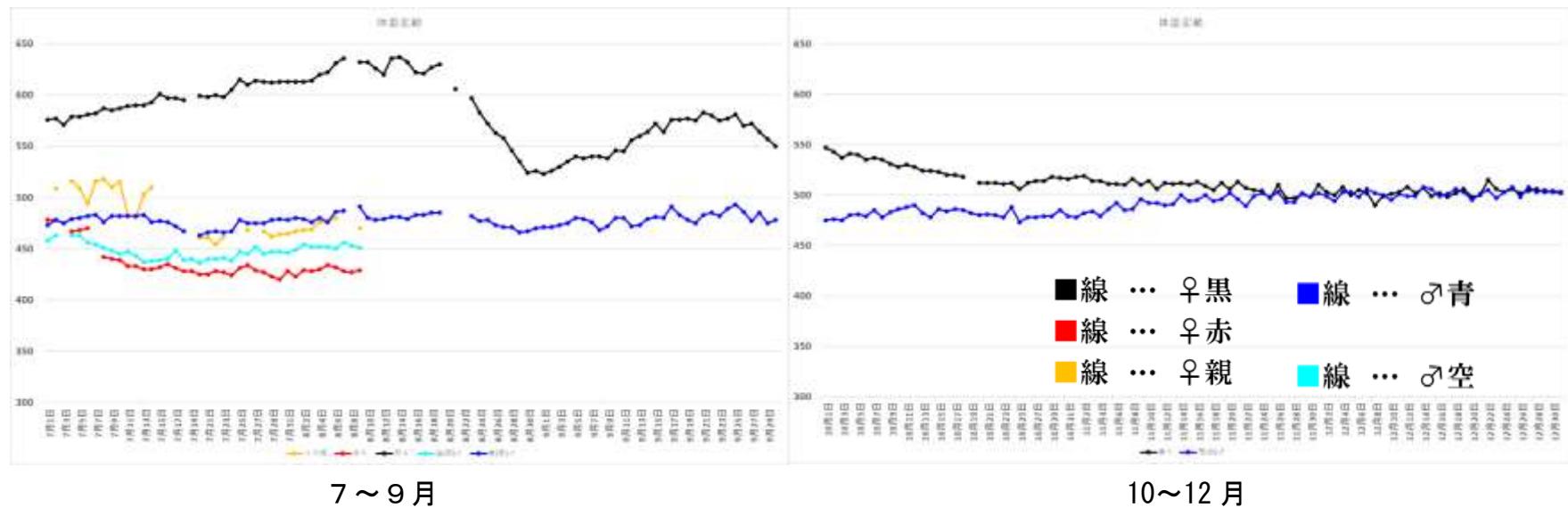
10月4日

12月28日

(4) 体重

雄（♂青）は、7～10月までは460～480g台で推移し、11月に入ってから490～500g台に、そのまま1月現在まで500g前後で安定している。

雌（♀黒）は、8月19日の時点で630gあったが、8月20日に飼育室を変更したのを機に524g（8月30日）まで減少した。その後再び増加に転じ9月25日には581gになったが、そこからは再び減少し始め、11月下旬からは500g前後で安定している。1月現在も500g前後で推移している。



(5) 食

ライチョウ専用ペレット、小松菜、コケモモ、リンゴを基本飼料に、ガンコウランの葉、イヌタデ・ミズヒキの穂（10月）、ナナカマドの実（11月）、ダケカンバ・サクラ冬芽（12月～）などを与えている。2月からはシダレヤナギ冬芽も給餌予定でいる。

(6) 夏までに給餌した高山植物の管理

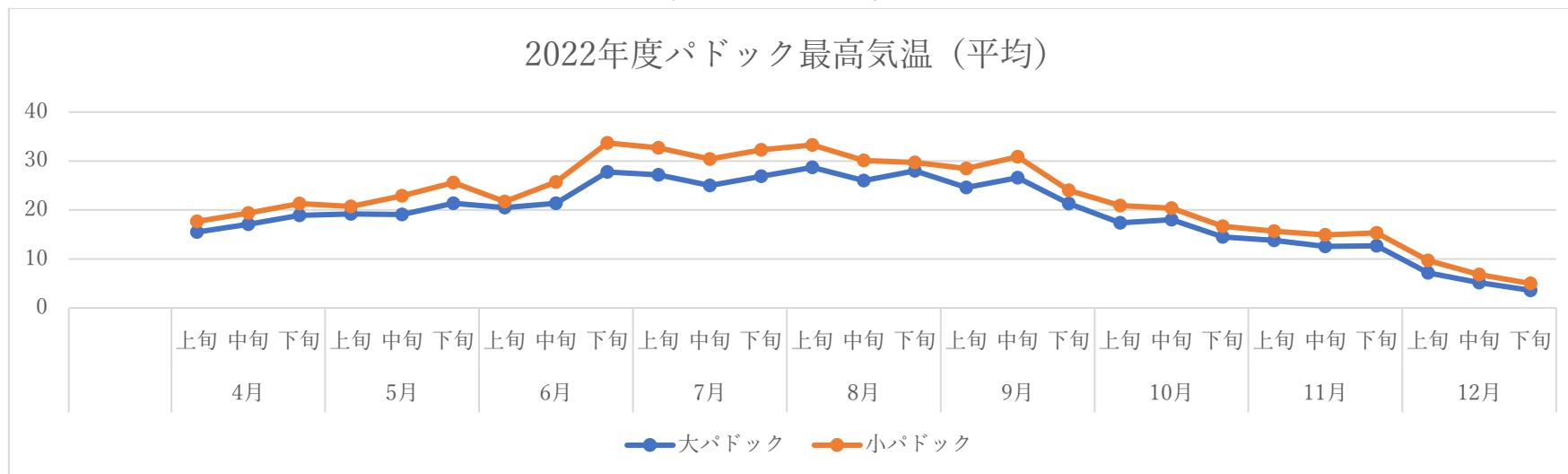
プラ箱に植えた高山植物（ガンコウラン、イワツメクサ、オンタデなど）は、ガンコウランの葉がつつかれてなくなるまでパドックに配置し続けた。冬季はプラ箱ごとライチョウにつつかれない場所へ移動させ冬越しをさせており、現在、イワツメクサ15箱、ガンコウラン15箱、オンタデ4箱、クロマメノキ3箱を保管している。

2. 次年度の飼育方法（今年度との変更点）

(1) 環境

寝室にガスバーナーで殺菌消毒した川砂を敷き詰めて、コンクリート床から砂床に変更する。糞便は掃き掃除により除去し、定期的に川砂を補充していく。床に川砂を敷くことにより、ライチョウの足裏への負担軽減、雛が高山植物へアクセスしやすくなる、舎内湿度の多湿の抑制などの効果が期待できる。

屋外運動場は、これまで大パドック側はスポットクーラーを2機配置して夏場の高温に対応していたが、小パドック用に使用予定だったスポットクーラーも移動させて3機配置して対応する。



(2)ペアリング

昨年は、冬季は雄の群れと雌の群れに分けて飼育し4月上旬から雌雄の同居を開始したが、現在は雌雄1羽ずつしかおらず、雌雄ともお互いの姿が視認できないと落ち着きが無くなり歩き回るため、特に雌のストレス軽減を目的に冬季も同居を継続している。

今年度同様、同居は日中のパドックのみとし、夜間の寝室は必ず分ける。日中のパドックでの同居時、雄の寝室とパドックはフリーにするが、雌の寝室に雄を絶対入れないようにする。

(3)巣

産座は5月上旬頃に、雌の飼育室(寝室③)の昇降式の扉から一番遠い部屋隅に配置する。巣の構造は今年度と同様であるが、巣内に使うミズゴケやハイマツの枯葉は乾燥した状態で造巣する。また、管理上散水はせず、自然状態で巣を保持する。

交尾が行われるようになったら、交尾時ののみ同居させ交尾確認後は毎回雌雄を分けるようにし、交尾終了後に雄を寝室④に収容して雌は寝室③とパドックをフリーにする。

雌が産卵を終えて抱卵を開始したら、雄は、寝室間の昇降式扉を閉鎖して寝室④に隔離する。時間帯によってパドックを雌雄で使い分けることになるが、雌の時間が多くなるよう配慮する。

巣中では雌個体がストレスを感じないよう、最小限の人的な関与で飼育を行う。

(4)餌

今年度の繁殖期は、ライチョウ専用ペレットの他にZPC(キジ用ペレット)や粒餌(ムキアワ)も与えていたが、次年度はライチョウ専用ペレットのみで他の飼料は混ぜないようにして、ビタミンとカルシウムの添加は行う。虫餌は体重測定時の際など最小限に留め、日常的な給餌は行わない。ミルワームを使用する場合はダスティングしたものを最小限使用する。

保管している高山植物についても芽吹いて食べられるようになれば順次給餌していく。

(5)孵化・育雛

①家族飼育

雛が孵化してしばらく様子を見て、母鳥が十分に雛の面倒をみて、雛も母鳥の指示に従うようになるのを確認してからパドックにも出して徐々に散歩させるようにする。散歩中はいつでも冷房の効いた寝室に戻れるようにしておく。散歩は午前と午後に分けて行う。寝床など頻繁に使用する場所は定期的に材を交換し、アイメリシア原虫の高濃度感染を防ぐ。

②餌

野菜（豆苗、小松菜、ミニトマトなど）、果実（リンゴ、コケモモ、ブルーベリー）は不断給餌とし、虫餌は那須の事例を参考に量を調整し、ミルワームはダスティングしたものを使用、SS サイズのコオロギも併用して与える。植物はイヌタデなどのタデ科の植物を中心に嗜好性が高く入手可能な野草を可能な限り与える。高山植物もガンコウラン、イワツメクサ、オンタデなど適宜給餌していく。クロウスゴの葉、クロマメノキの花実、ムカゴトラノオの穂は雛の嗜好性が高く、今年度同様環境省や白馬五竜高山植物園より提供していただく必要がある。

③ 野生順化

パドックには石や砂場、植栽などを配置して起伏に富んだ構造にすることにより、運動、砂浴び、避難などの行動を喚起する。植栽は直接地面に植えるのではなくプラ箱に植えたものを適宜交換して配置していく。可能な限りの高山植物を使用し、寝室内にも配置する。悪天候時もパドックを使用する。